近畿大学短大論集
第52巻 第1号（2019年12月）
p.1～15（(116)～(102)）

『続茶経』試訳（其三）

田中美佐　近畿大学短期大学部教授
原田　信　近畿大学経営学部准教授

2019年9月28日受理

抄録

中国では、古くより喫茶の風習が広まり、文化として成熟するなかで、茶書が著された。茶書の内容は多岐にわたるが、茶の歴史から産地、栽培、製造、飲用、茶具、効用など、茶に関わる事柄を総合的に記した書物の一つに、清の陸廷燦が著した『続茶経』がある。これは、唐の陸羽が著した最古の茶書『茶経』の続篇を標榜し、『茶経』の体例に倣って諸書の記載を輯録、整理したものである。『続茶経』は長期に渡る膨大な記載を収録しており、また、散佚した書物の記載も含まれるなど、茶文化を知る上で欠かすことのできない書物の一つである。しかし、これまで本書が日本語に翻訳されたことはなかった。

そこで、後の茶文化研究に資することを目的として、その日本語訳を試みたい。なお、紙幅に限りがあるため、本稿では『続茶経』の「二之具」の第一〇三条から第一四五条までの訳を示した。

キーワード

『続茶経』、陸廷燦、清、茶書、中国茶文化、翻訳

〈目次〉

はじめに
「二之具」　第一〇三条―第一四五条

A Trial Translation of *XuChajing*（『續茶經』）

Tanaka, Misa　　Harada, Makoto

Abstract

Historically, the books of tea, consisting of various topics, have been written in China, in the process that the customs of tea have become prevalent, spread, and matured across the country. *Xu Chajing*（『續茶經』）written by Lu Tingcan（陸廷燦）in the Qing（清）era is one of them. It includes producing areas, cultivation, production, drinking, utensils, and effects concerning tea. It followed *Chajing*（『茶經』）written by Lu Yu（陸羽）in Tang（唐）era. So it was titled *Xu Chajing*（『續茶經』）as the sequel to *Chajing*（『茶經』）. It contains lots of extracts related to tea, but some of them have been scattered and lost. Therefore, it is valuable literature in the field of studying Chinese tea culture. But it has not been translated into Japanese yet. Our aim is to contribute to the progress of research on Chinese tea culture by showing its translation. In this time, we have translated its sections 103-145 in chapter two（「二之具」）in this trial.

Key Words

Xu Chajing（『續茶經』）, Lu Tingcan（陸廷燦）, Qing（清）, books of tea, Chinese tea culture, translation

はじめに

唐代の陸羽が『茶経』を著して以後、中国では様々な茶書が著された。なかでも清の陸廷燦が編纂した『続茶経』は、茶の歴史から産地、栽培、製造、飲用、茶具、効用など諸書の記載を博捜しており、一大類書というべき書物である。中国における茶文化の多様なありさまを通覧し、その形成と変遷の過程を知る上で、『続茶経』は十分な参照価値があると言えよう。しかし、本書は一部の記載を除き、これまで翻訳されることはなかった。そこで、訳者はその全訳を試みることにした。

翻訳にあたっては、国立公文書館内閣文庫所蔵の『原本茶経』雍正十三年陸氏寿椿堂家刻本（『茶経』と『続茶経』の合刻本、請求記号は子〇六八―〇〇〇三）を底本とし、原文と和訳をそれぞれ示した。ただし、『続茶経』は版本間に、また引用文とその原本との間に異同が散見する。そこで、方健校注『中国茶書全集校証』（中州古籍出版社、二〇一五年）収録の「校証」に基づき、底本とした『続茶経』には見えるが、引用原典に無い文字は『　』中に示し、『続茶経』における脱字（あるいは省略）は〔　〕中に補った。また、底本と他の版本、あるいは底本と引用原典との間の文字の異同は該当箇所に下線を引いた上で〈　〉中に示した。以上の衍字、脱字、異同は、訳に適宜反映させた。このほか、陸廷燦によって記された、あるいは引用原典の割注は原文の（　）中に示し、和訳の（　）には原文割注の訳および筆者が補った人名、地名、年代などの説明を示した。なお、詩の和訳はまず訓読を示し、（　）に和訳を示した（詩歌については、石川忠久『茶をうたう詩「詠茶詩録」詳解』（研文出版、二〇一一年）を参照した）。

『続茶経』の内容は陸羽『茶経』の体例に従い「一之源」「二之具」「三之造」「四之器」「五之煮」「六之飲」「七之事」「八之出」「九之略」「十之図」に分かれており、末尾に「茶法」が附されている。これに序や凡例を加えると、全体の文字数は十万字近くある。本稿の紙幅は限られるため、以下では「二之具」のすべてにあたる第一〇三条から第一四五条までを訳出した。なお、これより前の訳は本誌第五十巻一号と五十一巻一号に掲載した。

續茶經卷上　　嘉亭陸廷燦撰　幔亭　輯

二之具

第一〇三条

【原文】

陸龜蒙集、和茶具十詠

【和訳】

以下は、唐の陸亀蒙の詩文集に見える、皮日休「茶中雑詠」詩に和した「茶具十詠に和す（襲美の茶具十詠に奉和す）」詩十首である。

第一〇四条

【原文】

茶塢

茗地曲隈回、野行多繚繞。向陽就中密、背澗差還少。遥盤雲髻慢、亂簇香篝小。何處好幽期、滿巖春露曉。

【和訳】

茶塢（山間の茶畑）

茗地　曲隈回り、野行　繚繞多し。陽に向かいて就中密に、澗に背きて差還た少し。遥かに盤りて雲髻慢く、乱れ簇りて　香篝小さし。何処か幽期に

好き、満巖　春露の暁。
（茶畑は見えつ隠れつ山を囲んでおり、そこまでは曲がりくねった道が多い。日差しのあたる山の南側には茶畑が密集しており、谷川を背にしたところはややまばらである。遠くに広がるさまは女性のまげがゆるんだようで、そのなかに薫籠のような形の茶木が不規則にむらがる。人知れず友と会うにはどこがよいだろう、山を覆う春の露に朝焼けが照り返している。）

第一〇五条

【原文】

茶人

天賦識靈草、自然鍾野姿。閒來北山下、似與東風期。雨後探芳去、雲間幽路危。唯應報春鳥、得共斯人知〔（顧渚山有報春鳥）〕。

【和訳】

茶人（茶摘み人）

天賦　霊草を識り、自然に野姿を鍾む。閑に北山の下に来るは、東風と期するに似たり。雨後　芳を探り去れば、雲間　幽路危し。唯だ応に報春の鳥のみ、斯の人と知るを得るべし。（顧渚山には春を告げる鳥がいる。）。
（天賦の才能で茶葉の良し悪しを見極め、自然な姿の茶葉を気ままに摘み集める。のんびりと北山の麓に来たのは、春の風と約束したようなもの。雨が止んだら香り高き草を探しにいくが、雲の間に隠れた山奥への道は実に険しい。春の到来を告げる百舌鳥だけが、道の向こうの茶摘み人と知り合いとなることができる。）

第一〇六条

【原文】

茶筍

所孕和氣深、時抽玉笋短。輕烟漸結華、嫩蘂初成管。尋來青靄曙、欲去紅雲煖。秀色自難逢、傾筐不曾滿。

【和訳】

茶筍（茶の芽）

孕む所の和気深く、時に玉笋を抽くこと短し。軽煙漸く華を結び、嫩蘂初めて管を成す。尋ね来れば青靄曙け、去らんと欲すれば紅雲暖し。秀色　自ら逢い難し、筐を傾るも曾て満たず。
（茶木が春の穏やかな気を育むと、玉箒のような短い芽が出てくる。芽は淡いかすみのなかで次第にその精華を吸収し、柔らかな芽が丸く巻いた葉へと成長する。青いもやが赤みを帯びる明け方に茶の芽を探しに来たが、帰る頃には夕日に赤く染まった雲がたなびいている。質の良い茶の芽に出会うのは難しく、これまで一度もかごに満ちたことがない。）

第一〇七条

【原文】

茶籯

金刀劈翠筠、織似波紋斜。製作自野老、攜持伴山娃。昨日鬬煙粒、今朝貯緑華。爭歌調笑曲、日暮方還家。

【和訳】

茶籯（茶摘み籠）

金刀　翠筠を劈き、織りて波紋の斜めなるに似たり。製作　野老自りし、

携持　山娃に伴う。昨日は煙粒を闘わしめ、今朝は緑華を貯う。争い歌う調笑の曲、日暮れて方に家へ還る。

（鉈で竹を割って竹ひごとし、これを編むと波が斜めに流れるような編み目のかごとなる。村の老人の手になるこのかご、山の娘に携えられて茶摘みについていく。昨日はかすみの粒のようだった茶の芽があつまり、今朝はみずみずしい茶葉がたくわえられている。娘たちは競って戯れ歌を歌い、日暮れになってようやく家に帰る。）

第一〇八条

【原文】

茶舎

旋取山上材、架爲山下屋。門因水勢斜、壁任巖隈曲。朝隨鳥俱散、暮與雲同宿。不憚採掇勞、秖憂官未足。

【和訳】

茶舎（製茶小屋）

旋ち山上の材を取り、架して山下の屋と為す。門は水勢に因りて斜めに、壁は巖隈に任せて曲る。朝に鳥に隨いて俱に散じ、暮に雲と同に宿す。採掇の労を憚ず、秖だ憂う　官の未だ足らざるを。

（またたく間に山上の木材を伐採し、麓に小屋を建てる。入り口は川の流れにそって斜めにつくり、崖にそってかたむいている。人々は朝になると空飛ぶ鳥とともに出かけ、日暮れになると雲とともにこの小屋に泊まる。茶葉を摘みに行く労力は厭わないが、ただお役人に渡す献上茶が不足することだけが心配だ。）

第一〇九条

【原文】

茶竈（經云竈無突。）

無突抱輕嵐、有烟映初旭。盈鍋玉泉沸、滿甑雲芽熟。奇香襲春桂、嫩色凌秋菊。煬者若吾徒、年年看不足。

【和訳】

茶竈（『茶経』には「茶を蒸すかまどに煙突はない」とある。）

突無くして軽嵐を抱き、煙有りて初旭に映ず。鍋に盈ちて玉泉沸き、甑に満ちて雲芽熟す。奇香　春桂を襲い、嫩色　秋菊を凌ぐ。煬者　若し吾が徒ならば、年年看れども足らざらん。

（かまどに煙突はなく山林から湧き上がるかのような湯気をまとい、立ち上る煙を夜明けの光が照らし出す。釜には満々たる泉水が煮え立ち、こしき一杯の茶芽が蒸され熟成している。そのすばらしい香りは黒灰の花の香りを打ち消し、淡い色は秋菊の美しさをも打ち負かす。もし、私たちがかまどの番をするならば、毎年眺めても飽きることはないだろう。）

第一一〇条

【原文】

茶焙

左右擣凝膏、朝昏布烟縷。方圓隨樣拍、次第依層取。山謡縱高下、火候還文武。見説焙前人、時時炙花脯。（紫花焙人以花爲脯。）

【和訳】

茶焙（ほいろ）

左右　凝膏を擣き、朝昏　煙縷を布く。方円　様に隨いて拍ち、次第に層

に依りて取る。山謡縦に高下し、火候還た文武たり。見説く焙前の人、時時花脯を炙る。（紫花瀬の製茶職人は花を焙じて乾燥花とする。）
（右も左も職人が臼で茶葉をついて糊状の茶膏とし、朝も夜も茶膏を蒸す煙がたなびいている。茶膏は型に合わせて大きさや形を整えられ、一つ一つ重ねた順に取り出す。山の民謡の歌声が高く低く気ままに響き渡り、茶を焙じる火加減を調える。聞くところでは、ほいろの番をする職人は余熱で乾燥花をつくるらしい。）

第一一一条

【原文】

茶鼎

新泉氣味良、古鐵形狀醜。那堪風雨〈雪〉夜、更値煙霞友。曾過頼石下、又住清〈青〉溪口（頼石、清溪、皆江南出茶處。）。且共薦皐盧（皐盧、茶名。）、何勞傾斗酒。

【和訳】

茶鼎（茶釜）

新泉　気味良く、古鉄　形状醜し。那ぞ堪ん風雨の夜、更に煙霞の友に値うに。曾て過ぐ頼石の下、又た住す清渓の口（頼石と清渓は、どちらも江南で茶を産する地域である。）且つ共に皐盧を薦む（皐盧は茶の名称である。）、何ぞ斗酒を傾けるを労せん。
（汲んだばかりの泉水は香味がよく、古い鉄の釜は使い込まれて醜く、味わい深く煤けている。この釜はどうして雨風吹きすさぶ夜の寂しさに耐え忍ぶ必要などあろうか、ともに山林に遊ぶ友人である茶と会うのだから。釜は私に携えられて、茶の産地である頼石の麓を訪ねたことがあるし、同じく茶の産地である清渓に泊まったこともある。釜と泉水が私に皐盧の茶を薦めてくるのだから、酒盃を傾ける必要などない。）

第一一二条

【原文】

茶甌

昔人謝堰垽、徒爲妍詞飾（劉孝威集有謝堰垽啟。）。豈如珪璧姿、又有煙嵐色。光參筠席上、韻雅金罍側。直使于闐君、從來未嘗識。

【和訳】

茶甌（茶碗）

昔人　堰垽を謝し、徒に妍詞の飾を為す（南朝・梁の『劉孝威集』には「堰垽を謝すの啓」がある）。豈に如かんや珪璧の姿の、又た煙嵐の色有るに。光は参す筠席の上、韻は雅なり金罍の側。直だ于闐の君をして、従来未だ嘗て識らざらしむ。
（昔の人は高台のある茶碗をもらった礼にと、むやみに美辞麗句で飾り立てた礼状を書いた。しかし、そのような言葉も、玉や宝石のように美しく、山林に湧き上がる自然の気の色を帯びた茶碗にはかなわない。竹の筵に置かれた茶碗は輝きを放ち、酒器の側にあって実に風情がある。玉を産する于闐の王も、この風趣を知らないことだろう。）

第一一三条

【原文】

煑茶

閒來松間坐、看煑松上雪。時於浪花裏、併下藍英末。傾餘精爽健、忽似氛埃滅。不合別觀書、但宜窺玉札。

【和訳】

煮茶（茶を煮る）

閑来　松間に坐し、松上の雪を煮るを看る。時に浪花の裏に、併せ下す藍英の末。傾余　精爽健やかに、忽ち氛埃の滅ずるに似る。合に別に書を観るべからず、但だ宜しく玉札を窺うべし。

（なんとはなしに松林に来て心静かに座し、松を覆う雪を煮るのを見る。ちょうど沸き立った湯のなかに、粉末の茶を投じる。これを飲んでしばらくすると、気分は爽快となり、心中の濁った気が消滅するかのようである。このような時に世俗の書物など読むべきではなく、ただ道家の書物を眺めるのが良い。）

第一一四条

【原文】

皮日休集、茶中雑咏茶具

【和訳】

以下は、唐の皮日休の詩文集にある「茶中雑詠」詩のなかでも、茶具を詠じた詩である。

第一一五条

【原文】

茶籯

筤篣曉攜去、驀過山桑塢。開時送紫茗、負處沾清露。歇把傍雲泉、歸將挂煙樹。滿此是生涯、黄金何足數。

【和訳】

茶籯（茶摘みかご）

筤篣　暁に携さえ去り、山桑の塢を驀え過ぐ。開く時　紫茗を送り、負う処　清露に沾う。把るを歇めて雲泉に傍い、帰り將ちて煙樹に挂く。此に満つる　是れ生涯、黄金　何ぞ数うるに足らん。

（茶摘みかごを携えて明け方に出発し、山桑の生い茂る土手を越えて行く。かごを開ければ良質の茶葉を収め、背負えば茶葉の清らかな露が背中を濡らす。摘む手を止めて泉の側に休み、帰ってくれば、もやをまとった木の枝に掛ける。かごを良質の茶葉で満たすのがその人生、黄金など大した価値もない。）

第一一六条

【原文】

茶竈

南山茶事動、竈起巖根傍。水煑石髪氣、薪燃杉脂香。青瓊蒸後凝、緑髓炊來光。如何重辛苦、一一輸膏粱。

【和訳】

茶竈（茶を蒸すかまど。）

南山に茶事動き、竈は起る巖根の傍。水もて煮る石髪の気、薪もて燃す杉脂の香。青瓊　蒸して後に凝り、緑髓　炊き来りて光る。如何ぞ辛苦を重ねて、一一膏粱に輸す。

（南山で茶の生産作業が始まると、崖の付け根にかまどをつくる。水を沸かせば水苔の気が立ち上り、薪を燃やせば杉脂の香りが立ち込める。青い宝石のような茶葉は蒸すと固まり、茶葉を煮るとその液は緑色の宝玉のように輝いている。このように苦労を重ねて作った茶は、一つまた一つと金持ちのも

とへ運ばれていく。）

第一一七条

【原文】

茶焙

鑿彼碧巖下、恰應深二尺。泥易帶雲根、燒難碍石脉。初能燥金餅、漸見乾瓊液。九里共杉林（皆焙名。）、相望在山側。

【和訳】

茶焙（ほいろ）

彼の碧巖の下を鑿ち、恰も応に深さ二尺なるべし。泥は雲根を帯び易く、焼は石脈を碍げ難し。初め能く金餅を燥し、漸く見る瓊液を乾すを。九里と杉林と（どちらも製茶場の名称である）、相い望みて山側に在り。

（碧巖の麓に穴を掘り、その深さはちょうど二尺ほどもある。穴の中に塗り固めた泥には石が混じっており、火を起こすと石のすき間からほのかな明かりがもれだす。ここで、茶餅を炙ると、次第に水分がとび乾いてくる。製茶場の九里と杉林は、互いに向かいあうかのように山すそにある。）

第一一八条

【原文】

茶鼎

龍舒有良匠、鑄此佳様成。立作菌蠢勢、煎爲潺湲聲。草堂暮雲陰、松窓殘月明。此時勺複茗、野語知逾清。

【和訳】

茶鼎（茶釜）

龍舒に良匠有り、此の佳様を鋳て成る。立てて菌蠢の勢を作し、煎じて潺湲の声を為す。草堂　暮雲陰り、松窓　残月明るし。此の時　複茗を勺す、野語　逾いよ清きを知る。

（龍舒に腕の良い職人がおり、姿の美しい茶釜を鋳る。立てて置けば、その姿は霊芝のように味わいがあり、茶を煮ると、さらさらと水が流れるような心地よい音を発する。わたしの草蘆には黄昏の雲の影がかかり、窓からは欠けた月の光が明るく差し込む。この時に二杯目の茶を飲み、雑談をしていると心が益々清らかになっていくのがわかる。）

第一一九条

【原文】

茶甌

邢客與越人、皆能造茲器。圓似月魂墮、輕如雲魄起。棗花勢旋眼、蘋沫香沾齒。松下時一看、支公亦如此。

【和訳】

茶甌（茶碗）

邢客と越人と、皆な能く茲の器を造る。円きこと月魂の墮つるに似たり、軽きこと雲魄の起こるが如し。棗花　勢い眼を旋り、蘋沫　香り歯を沾す。松下　時に一たび看れば、支公も亦た此くの如くならん。

（陶磁の産地である邢州と越州の人は、巧みに茶碗をつくる。その姿は天上から月が落ちてきたかのように丸く、わきあがる雲のように軽い。茶に浮かぶ、ナツメの花のような泡はふわふわと円を描いてめぐり、水草のような泡は清々しい香りで口を潤してくれる。松の下でこの光景を見れば、支遁も同

じように茶を飲んだことだろう。）

第一二〇条

【原文】

江西志、餘干縣冠山有陸羽茶竈、羽嘗鑿石爲竈、取越溪水、煎茶於此。

【和訳】

『江西志』には次のようにある。「余干県（現在の江西省上饒市余干県）の冠山には、陸羽が茶を煮たかまどがある。昔、陸羽は石を削ってかまどを作り、越渓の水を汲み、ここで茶を煮たという。」

第一二一条

【原文】

陶穀清異録、豹革爲囊、風神呼吸之具也。煮茶啜之、可以滌滯思、而起清風。毎引此義、稱之〈茶〉爲水豹囊。

【和訳】

宋初の陶穀『清異録』には次のようにある。「豹の革でつくった袋は、風神が息をするかのように風を起こす道具である。茶を煮てすすると、よどんだ気持ちや思考を洗い流すことができる。これは、涼しい風が吹くのと同じように心地よい。人々はこの心地よさと豹革の袋をかけて、茶のことを「水豹嚢」というのである。」

第一二二条

【原文】

曲洧舊聞、范蜀公與司馬温公同遊嵩山、各攜茶以行。温公取〈以〉紙爲帖。蜀公用小〔黒〕木合子盛之。温公見而驚曰、景仁乃有茶具〈器〉也。蜀公聞其言、留合與寺僧而去。後來士大夫、茶具精麗、極世間之工巧而心猶未厭。晁以道嘗以此語客、客曰、使温公見今日之茶具、又不知云如何也。

【和訳】

南宋の朱弁『曲洧旧聞』には次のようにある。「北宋の重臣であった范鎮と司馬光が連れ立って嵩山を遊覧した際、二人は茶を持っていった。司馬光は紙を折って茶を包んでいた。一方、范鎮は黒い木の小箱に茶を入れていた。司馬光はその小箱を見て驚き、「景仁（范鎮の字）は、なんと茶具をお持ちなのか」と言った。范鎮はその言葉を聞き、小箱を嵩山の寺の僧に預けて帰った。後世の士大夫が用いる茶具は贅を尽くしており、その細工は世の精緻を極めていてもまだ飽き足らないほどである。かつて、晁説之がこの故事を客人に語ったところ、客人は「司馬光が今日の茶具を見たら、なんとおっしゃることだろうか」と言ったという。」

第一二三条

【原文】

北苑貢茶《別》録、茶具有銀模、〔銅模〕、銀圈、竹圈、銅圈等。

【和訳】

北宋末からから南宋初の熊蕃『北苑貢茶録』には次のようにある。「献上用の団茶の成形には銀製、銅製の型枠が用いられ、包装には銀や竹、銅の輪が用いられた。」

第一二四条

【原文】

梅堯臣宛陵集茶竈詩、山寺碧溪頭、幽人綠巖畔。夜火竹聲乾、春甌茗花亂。茲無雅趣兼、薪桂煩燃爨。

【和訳】

北宋の梅堯臣『宛陵集』に収録されている「茶竈」詩には「山寺　碧溪の頭、幽人　緑巖の畔。夜火　竹声乾き、春甌　茗花乱る。茲に雅趣を兼ねる無く、薪桂　燃爨を煩う（山中の寺は青く澄んだ谷川のほとりにあり、隠者は緑鮮やかな山崖のすそにたたずんでいる。夜、火の明かりに竹林の乾いた囁きが聞こえ、春の茶を注いだ碗に浮かぶ泡ははかなく消える。今、情趣が加わることはなく、燃やされ湯を沸かすのを、薪は煩わしく思うことだろう）」とある。

第一二五条

【原文】

又茶磨詩〈二首〉云、楚匠斲山骨、折檀爲轉臍。乾坤人力內、日月蟻行迷。

【和訳】

同じく梅堯臣の『宛陵集』に収録されている「茶磨詩」には「楚匠　山骨を斲り、檀を折りて転臍と為す。乾坤　人力の内、日月　蟻行して迷う（腕の良い職人は山から切り出した石材を削って臼をつくり、硬い良木を切り倒して臼の軸とする。上臼と下臼を動かすのは人の力、茶葉は毎日、臼のなかをゆっくりと進み道に迷ってしまう）」とある。

第一二六条

【原文】

又有謝晏太祝遺雙井茶五品茶具四枚詩〈晏成績太祝遺雙井茶五品茶具四枚近詩六十篇因以爲謝〉。

【和訳】

同じく梅堯臣の『宛陵集』には「晏太祝の双井茶五品、茶具四枚を遺るに謝す詩」が収録されている。

第一二七条

【原文】

武夷志、五曲朱文公書院前、溪中有茶竈。文公詩云、仙翁遺石竈、宛在水中央。飲罷方舟去、茶烟裊細香。

【和訳】

『武夷志』には次のようにある。「武夷山の五曲にある朱熹創建の書院の前、渓流のところには茶を煮たかまどがある。朱熹の「茶竈」詩には「仙翁石竈を遺す、宛として水の中央に在り。飲み罷りて舟を方べて去れば、茶煙細香裊る（仙人の残したというかまど岩は、今もそのまま谷川の中央にある。茶を飲み終え舟を並べて去ると、茶を煮た後の煙がかすかな香りを帯びて立ち上る）」とある。」

第一二八条

【原文】

羣芳譜、黄山谷云、相茶瓢與相筇竹同法。不欲肥而欲瘦、但須飽風霜〈霜露〉耳。

【和訳】

明の王象晋『二如亭群芳譜』が引く黄庭堅の「敦礼秘校に与うる帖」には次のようにある。「杓の材料である瓢箪の良し悪しを見極める方法は、杖の材料である羅漢竹を見極めるのと同様である。大きく肥えたものではなく細く痩せたものを求めなさい。十分に風霜に晒されたものであれば、それでよい。」

第一二九条

【原文】

樂純雪菴清史、陸叟溺於茗事、嘗爲茶論并煎炙之法。造茶具二十四事、以都統籠貯之、時好事者家藏一副。於是、若韋鴻臚、木待制、金法曹、石轉運、胡員外、羅樞密、宗從事、漆雕祕閣、陶寶文、湯提點、竺副帥、司職方輩、皆入吾籯中矣。

【和訳】

明の楽純『雪庵清史』には次のようにある。「むかし陸羽は茶事に没頭して『茶論』を著し、茶の製造法や飲用法を述べた。さらに二十四種の茶具をつくり、これらを「都統籠」という大きなかごに収めた。当時の好事者の家には、茶具一揃いを収めた「都統籠」があったものである。これに倣って、韋鴻臚、木待制、金法曹、石転運、胡員外、羅枢密、宗従事、漆雕秘閣、陶宝文、湯提点、竺副帥、司職方という、官吏に擬した雅称をつけられた茶具は、すべて私のかごの中に収められている。」

第一三〇条

【原文】

許次杼〈紓〉茶疏、凡士人登山臨水、必命壺觴、若茗椀、薫爐、置而不問、是徒豪舉耳。余特置游装、精茗、名〈茗〉香同行異室、茶罌、銚、注、甌、洗、盆、巾諸具畢備、而附以香匳、小爐、香囊、匙箸。

【和訳】

明の許次紓『茶疏』には次のようにある。「士人は山水に遊ぶ際、必ず酒器を持参するものである。しかし、茶碗や香炉を気にも留めないならば、それは形だけ自らが文人だとをひけらかしているにすぎない。私が山水に遊ぶ際は、特に専用の荷物を支度し、良質の茶と香をそれぞれ別の器に分けて収める。また、茶罌（茶葉を入れる壺）、銚（やかん）、注（急須）、甌（茶碗）、洗（茶碗を洗う鉢）、盆（たらい）、巾（茶巾）といった茶具をすべて揃え、香匳（香箱）、小爐（小型の香炉）、香嚢（香袋）、匙箸（ちりれんげと箸）も荷物に加える。」

第一三一条

【原文】

未曾汲水、先備茶具、必潔、必燥。瀹時、壺蓋必仰置、磁盂勿覆。案上漆氣、食氣、皆能敗茶。

【和訳】

明の許次紓『茶疏』には次のようにもある。「水を汲む前に、まず茶具を準備する。茶具は清潔で乾燥した状態に保たなければならない。茶を煮る際、急須の蓋は内側を上に向けて置くべきであり、磁器の茶碗は飲み口を下に伏せて置いてはならない。几案の塗装に含まれる漆の気や、几案に染み付いた食物の気は、いずれも茶の香味を損なうからである。」

第一三二条

【原文】

朱存理茶具圖贊〔後〕序、飲之用必先茶、而制茶必有其具。錫具姓而繫名、寵以爵、加以號、季宋之彌文。然清逸、高遠上通王公、下逮林野、亦雅道也。願與十二先生周旋、嘗山泉極品以終身、此閒富貴也。天豈靳乎哉。

【和訳】

明の朱存理『茶具図賛』の〔後〕序には次のようにある。「飲用に供されるもののなかで、尊重されるべきは茶である。そして、茶の加工や飲用には、必ず適切な道具や茶具をそろえなければならない。道具や茶具は姓をたまわり、官職に名を連ね、寵愛されて爵位を与えられ、さらには号までも与えられた。宋代末期には、このように華美に陥るほど文運が隆盛したのである。しかも、この現象の背景にある清逸で高邁な精神は、上は王公から下は庶民にまで及んでおり、世俗を超越した高雅な道であったとも言える。私は茶具十二先生と交際し、山泉の名水で淹れた極上の茶を味わってこの生涯を終えることを願ってやまない。これこそ富や地位には代えがたい清閑な人生というものである。天はきっとこのような人生を過ごす幸せを私に与えてくれることだろう。」

第一三三条

【原文】

審安老人茶具〔圖贊〕十二先生姓名〔字號〕。

韋鴻臚（文鼎、景暘、四窗閒叟。）

木待制（利濟、忘機、隔竹主人。）

金法曹（研古、元鍇、雍之舊民。）

（鑠古、仲鑑、和琴先生。）

石轉運（鑿齒、遄行、香屋隱君。）

胡員外（惟一、宗許、貯月仙翁。）

羅樞密（若藥、傳〈傅〉師、思隱寮長。）

宗從事（子弗、不遺、掃〈柿〉雲溪友。）

漆雕祕閣（承之、易持、古臺老人。）

陶寶文（去越、自厚、兎園上客。）

湯提點（發新、一鳴、溫谷遺老。）

竺副帥（善調、希默、雪濤公子〈齋居士〉。）

司職方（成式、如素、潔齋居士。）

【和訳】

南宋の審安老人『茶具図賛』に記された十二先生の姓名、字、号は以下の通りである。

韋鴻臚（名は文鼎、字は景暘、号は四窓閑叟。）…茶を焙じる竹製のかご。

木待制（名は利済、字は忘機、号は隔竹主人。）…木製のつき臼。

金法曹（名は研古、字は元鍇、号は雍之旧民。）…金属製の茶碾（薬研）。

（名は鑠古、字は仲鑑、号は和琴先生。）…右に同じ。

石転運（名は鑿歯、字は遄行、号は香屋隠君。）…石製のひき臼。

胡員外（名は惟一、字は宗許、号は貯月仙翁。）…瓢箪製の杓。

羅枢密（名は若薬、字は傳師、号は思隠寮長。）…絹を張った篩。

宗従事（名は子弗、字は不遺、号は掃雲溪友。）…棕櫚製の茶箒。

漆雕秘閣（名は承之、字は易持、号は古台老人。）…彫漆の茶托。

陶宝文（名は去越、字は自厚、号は兎園上客。）…茶碗。

湯提点（名は発新、字は一鳴、号は温谷遺老。）…やかん。

竺副帥（名は善調、字は希黙、号は雪斎居士。）…茶筅。

司職方（名は成式、字は如素、号は潔斎居士。）…茶巾。

第一三四条

【原文】

高濂遵生八牋、茶具十六事（器）、收貯於器局內、供役於苦節君者、故立名管之。蓋欲歸統於一、以其素有貞心雅操、而自能守之也。

商象（古石鼎也、用以煎茶。）
降紅（銅火筯也、用以簇火、不用聯索爲便。）
逓火（銅火斗也、用以搬火。）
團風（素竹扇也、用以發火。）
分盈（挹水杓也、用以量水觔兩。卽茶經水則也。）
執權（準茶秤也、用以衡茶。每杓水二觔〈升〉、用茶一兩。）
注春（磁瓦壺也、用以注茶。）
啜香（磁瓦甌也、用以啜茗。）
撩雲（竹茶匙也、用以取果〈茶〉。）
納敬（竹茶槖也、用以放盞。）
漉塵（洗茶籃也、用以澣茶。）
歸潔（竹筅箒也、用以滌壺。）
受汚（拭抹布也、用以潔甌。）
靜沸（竹架、卽茶經支鍑也。）
運鋒（劙果刀也、用以切果。）
甘鈍（木礎墼也。）

【和訳】

明の高濂『遵生八牋』の「茶具十六事」には次のようにある。「十六種の茶具は器局に収納され、苦節君が茶を煮る際の労役に服する（湘竹の風爐で茶を煮る際に使用する）。このため、それぞれの茶具に名前をつけて管理する。茶具が一つの器局に収まろうとするのは、婦人のように貞節の心をもち、かたく操を守るからである。」

商象（古い石製の鼎。茶を煮るのに用いる。）
降紅（銅製の火箸。炭火を集めるのに用いる。環で一つに繋がっていないものが使いやすい。）
逓火（銅製の十能。炭火を運ぶのに用いる。）
団風（斑紋のない竹の団扇。火をおこすのに用いる。）
分盈（水を汲む杓。水の目方を量るのに用いる。『茶経』にある「水則」のこと。）
執権（茶を量る秤。茶の分量を量るのに用いる。水二升に対して、茶一両の割合とする。）
注春（磁器の急須。茶を注ぐのに用いる。）
啜香（磁器の茶碗。茶を飲むのに用いる。）
撩雲（竹製の茶匙。茶をすくい取るのに用いる。）
納敬（竹製の茶托。茶碗を置くのに用いる。）
漉塵（茶を洗う竹かご。茶葉をすすぐのに用いる。）
帰潔（竹製のささら。急須を洗うのに用いる。）
受汚（布巾。茶碗を拭うのに用いる。）
静沸（竹製の交床。すなわち『茶経』にある「支鍑」のこと。）
運鋒（果物を切る小刀。果物を切るのに用いる。）
甘鈍（木製のまな板。）

第一三五条

【原文】

王友石譜〈竹爐新詠故事〉、竹爐并分封茶具六事。

苦節君（湘竹風爐也、用以煎茶。更有行省收藏之。）
建城（以篰爲籠、封茶以貯庋閣。）

雲屯（磁瓦瓶、用以杓泉、以供煮水。）
水曹（卽磁缸瓦缶、用以貯泉、以供火鼎。）
烏府（以竹爲籃、用以盛炭、爲煎茶之資。）
器局（編竹爲方箱、用以總收以上諸茶具者。）
品司（編竹爲圓撞〈橦〉提盒、用以收貯各品茶葉、以待烹品者也。）

【和訳】

明の王紱『竹爐新詠故事』には、竹爐が六種の茶具を取り立て、称号を与えたことが記されている。

苦節君（斑竹製の風炉。茶を煮るのに用いる。さらに「苦節君の行省（苦節君の統治する地域）」と呼ばれる斑竹製のかごがあり、これに風炉を収める。）
建城（箬竹製のかご。これに茶を収め、高い棚に置いて保管する。）
雲屯（磁器の水注。泉水を汲み、この水で湯を沸かす。）
水曹（すなわち磁器の水指。泉水を貯め、この水を鼎に注ぐ。）
烏府（竹の炭かご。炭を盛り、この炭で茶を煮る。）
器局（竹を編んだ方形の箱。右に記した茶具を収める。）
品司（竹を編んだ、円形で段の分かれた手提げ箱。各種茶葉を収め、茶を煮るのに備える。）

第一三六条

【原文】

屠赤水茶箋、茶具。
湘筠焙（焙茶箱也。）
鳴泉（煑茶磁罐。）
沉垢（古茶洗。）
合香（藏日支茶瓶〈葉〉、以貯司品者。）
易持（用以納茶、卽漆雕祕閣。）

【和訳】

明の屠隆『茶箋』には以下の茶具が記されている。

湘筠焙（茶を焙じるのに用いる、竹を編んだ箱である。）
鳴泉（茶を煮るための磁製の器。）
沉垢（古の「茶洗（茶具を洗う道具）」。）
合香（日用の茶葉を収める瓶であり、様々な茶葉を保管する。）
易持（茶碗を受けるのに用いる。『茶具図賛』に見える「漆雕秘閣」のことである。）

第一三七条

【原文】

屠隆考槃餘事、構一斗室、相傍書齋、內設茶具、教一童子、專主茶役。以供長日清談、寒宵兀坐。此幽人首務、不可少廢者。

【和訳】

明の屠隆『考槃余事』には次のようにある。「構えた小部屋は書斎のわきにある。なかに茶具を置き、一人の童子を指導し、茶の事だけに従事させる。童子が煮た茶を日がな一日の清談に供し、寒夜には一人端座する。これは、俗塵を避ける隠者がまずなすべきことであり、少しも怠ってはならない。」

第一三八条

【原文】

灌園史、盧廷璧嗜茶成癖、號茶庵。嘗蓄元僧詎可庭茶具十事、具衣冠拜之。

【和訳】

明の陳詩教『灌園史』には次のようにある。「盧廷璧はあまりに茶を好んで遂には茶癖を患い、茶庵と号した。盧氏は元代の僧・詎可庭の茶具十種を所有しており、衣冠を正して茶具に向かい、謹んで拝礼していた。」

第一三九条

【原文】

周亮工閩小紀〈王象晋羣芳譜〉、閩人以粗磁膽瓶貯茶。近鼓山支提新茗出、一時盡學。新安製爲方圓錫具、遂覺神采奕奕不同。

【和訳】

明末清初の周亮工『閩小紀』に次のようにある。「福建の人々は、もともと目の粗い磁器で作った下蕪の瓶に茶を貯えていた。ところが近年、徽州（安徽）にある鼓山の寺院で新たな茶がつくられると、徽州の作法が一斉を風靡し、誰もが学ぶようになった。また、徽州府の新安では方形や円形の錫製茶具が作られている。これは通常の茶具とは異なり、とても美しい。」

第一四〇条

【原文】

馮可賓岕茶箋論茶具、茶壺以窰器爲上、錫次之。茶杯汝、官、哥、定、如未可多得、則適意者爲佳耳。

【和訳】

明の馮可賓『岕茶箋』の「茶具を論ず」に次のようにある。「急須は陶磁器が最も良く、錫製のものがこれに次ぐ。茶碗は汝窯、官窯、哥窯、定窯で焼かれたものが良いが、どれもなかなか手に入らないので、自らの好みに合うものであればよい。」

第一四一条

【原文】

李日華紫桃軒雜綴、昌化茶、大葉如桃枝柳梗、乃極香。余過逆旅偶得、手摩其焙甑、三日龍麝氣不斷。

【和訳】

明の李日華『紫桃軒雜綴』に次のようにある。「昌化茶は葉が大きく、茎は桃や柳のようで、香りが極めて強い。私は以前、旅籠でたまたま昌化茶を手にいれたことがある。この茶を焙じた竹かごをさすったところ、三日の間、その香気が手から消えなかった。」

第一四二条

【原文】

臞仙云、古之所有茶竈、但聞其名、未嘗見其物、想必無如此清氣也。予乃陶土粉以爲瓦器。不用泥土爲之、大能耐火、雖猛焰不裂。徑不過尺五、高不過二尺余、上下皆鏤銘、頌、箴戒之。又置湯壺於上。其座皆空、下有陽谷之穴、可以藏瓢甌之具、清氣倍常。

【和訳】

明の朱権は次のように述べている。「古に存在したという茶竈は、その名

を聞くだけで、実物を見たことがない。思うに、古人が用いたからには、これ以上に雅趣に富んだ茶具は他にないにちがいない。そこで、わたしは陶土を沈殿させた細やかな粉で素焼きの茶竈をつくった。磁器を焼く粘土を用いなかったので、茶竈は耐火性に優れ、非常に強い火にあてても割れない。直径は一尺五寸、高さは二尺ばかりに過ぎず、上部、下部ともに銘や頌、箴や戒といった文を刻んだ。また、その上にはやかんを置いた。台座は空洞になっており、その下に「陽谷の穴」があり、茶碗や瓢箪の柄杓など質素な道具をしまえるようにしてある。この茶竈を用いれば、高尚な趣は倍増する。」

第一四三条

【原文】

重慶府志、涪江青蟾石、爲茶磨極佳。

【和訳】

『重慶府志』には「四川の涪江に産する青蟾石は、茶臼にすると品質が極めて良い」とある。

第一四四条

【原文】

南安府志、崇義縣出茶磨、以上猶縣石門山石爲之、尤佳。蒼磬縝密、鐫琢堪施。

【和訳】

『南安府志』に次のようにある。「崇義県（現在の江西省贛州市崇義県）では茶臼が作られており、なかでも、上猶県（現在の江西省贛州市上猶県）の石門山に産する石で作ったものは特に良い。この石は青黒く緻密で、彫刻を施すに十分な品質である。」

第一四五条

【原文】

聞龍茶箋、茶具滌畢、覆於竹架、俟其自乾爲佳。其拭巾只宜拭外、切忌拭內。蓋布帨雖潔、一經人手、極易作氣。縱器不乾、亦無大害。

【和訳】

明の聞龍『茶箋』には次のようにある。「茶具をすすぎ終わったら、竹製の台にふせて置き、自然に乾くのを待つのがよい。布巾で茶具の外側だけを拭い、内側を拭ってはならない。どれほど清潔な布巾であっても、ひとたび手で触れると、臭いを生じやすいからである。たとえ茶具の内側が乾いていなくても、大した問題ではない。」

續茶經上

男　紹良　較宇